

城下町探訪 50

2010/3/18

広澤寺・玄向寺

里山辺の広澤寺は小笠原氏の菩提寺であり、大村の玄向寺は水野氏の廟所で明治初年の松本藩の廃仏毀釈を旧松本領主の寺ということで免れた。城下町からは少し離れた所に位置する領主ゆかりの寺を訪ねてみたい。

1 小笠原氏廟所 広澤寺

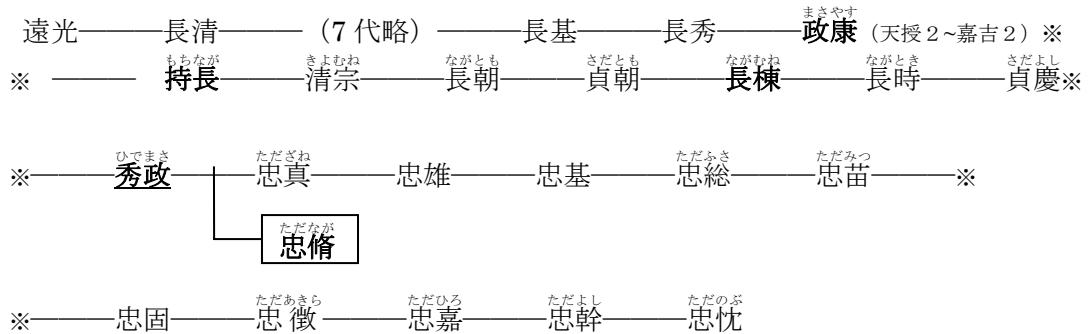
「信府統記」によれば「信濃の守護小笠原政康の時、嘉吉元年（1441）林の地に護法山乗蓮寺を建立した。その後、宝徳元年（1449）小笠原持長の時、護法山龍雲寺と改め、天文18年（1549）小笠原長棟が没した時、長棟ながむねの法名が広沢寺殿天祥正安と号したので寺号を龍雲山広沢寺と改めた」とあります。

元和元年（1615）5月7日大坂夏の陣において小笠原秀政・忠脩ただむね父子が戦死しました。秀政の遺骨は初め埋橋に葬られましたが、安永10年（1781）水害のため広沢寺に改葬しました。「旧松本市史上349P」によれば 忠脩の遺骨は「浅間御殿山（大隆寺）塋域は忠脩埋骨の所ならん。」としています。現在御殿山大隆寺跡に建つ三塔は貞享3年（1686）年水野氏によって建立された塔で忠脩・秀政・貞慶の供養塔です。

現在広沢寺には、秀政と忠脩の五輪塔二基が並んで建っています。

明治初年の松本藩の廃仏毀釈にも旧領主ゆかりの寺ということで廃寺を免れ小笠原家の廟所として、また、当地方の禅宗の古刹として現在に至っています。

小笠原氏系図



歴史群像名城シリーズ「松本城」より）



五輪塔

向かって

右 両選院殿義叟宗玄大居士（秀政 47 歳）

左 法性寺殿正甫宗中大居士（忠脩 22 歳）

2 文化 11 年 旧領主小笠原氏広沢寺廟参

元和 3 年（1617）松本城主小笠原忠真^{ただまね}は播磨国明石へ2万石加増され10万石で転封となった。残された廟所と小笠原家の関係はどのようなものであったのだろうか。

河辺文書には九州小倉城主となっていた小笠原家が文化 11 年（1814）と弘化 3 年（1846）に広沢寺廟参をおこなった記録が残っている。ここでは文化 11 年の廟参について紹介する。

小笠原家にとって文化 11 年は特別な年でした。大坂夏の陣で小笠原秀政・忠脩父子が亡くなって200年目に当たっていました。5月5日・6日・7日2夜3日広沢寺に法会があり、小笠原家から本多利左衛門が差し向けられています。この特別な年の故に藩主自ら廟参が行われたと考えられます。

8月9日江戸発で参勤交代の帰路、8月15日中山道下諏訪宿から塩尻宿休み、村井宿小休にて松本に、日入り頃着き、本陣倉科七郎左衛門宅に宿泊した。一行は544人、随行者の宿所は本町一丁目から博労町^{ちゅうろうげん}まで56軒、仲間小者は中町から東町まで16軒に宿泊した。

松本藩では物頭^{ものがしら}藤井甚助が人数を連れて極楽寺前を固め、町奉行清水内は生坂屋喜八方に陣取っていた。小笠原氏の御使者が御使者宿^{おししやど}に来た時、応対したのは軍師稲村小市右衛門で御城にこれを報告した。御城から本陣への使いは軍師浦野勘左衛門で松本藩の進物を持ってうかがっている。鳴30羽・あるへいとう、金米糖一折・干菓子一折・むし菓子一折である。小笠原氏からの進物は塩鯛20枚・紗綾5巻である。また、松本藩御年寄8名に小糸縞1反ずつの進物があった。

8月16日、4つ時（午前10時）行列を整えて廟参が行なわれました。道筋は本町・中町・東町・山家小路・清水村・筑摩大路通八幡宮後の道筋東へ、直路林村中より南へ・大門に出る。乗り物にて客殿より衆寮で乗り物を降り荒菰の上を歩いて廟に参っています。

両選院殿と法性寺殿に白銀5枚・先祖御霊に白銀一枚を献上しています。

それから客殿に歩行にて移られ、お吸い物・お酒・御調菜二汁五菜を召し上がられました。付き従うお付き家来たちもここで小休止となりました。小笠原家から広沢寺へは合わせて金二五両余の御礼があったと記されています。勿論、松本藩は郡奉行野々山矢門が手代と供に出ばり、お手先10人が警戒にあたっていました。八つ時（午後2時）下山となり、松本藩は5人の先払い同心を一行の前を走らせています。昼食は本陣で取り、7つ時（16時）洗馬宿に向けて発籠していきました。小笠原家は警備の役人に対して金11両2朱余を御礼として藩に渡しています。こうして小笠原家の廟参が終わりました。

弘化3年には小笠原左京大夫忠徴^{ただあきら}が8月20日松本泊、21日廟参の後、出立していません。

3 水野氏廟所 玄向寺

「信府統記」及び「旧松本市史」によれば、永禄4年（1561）長誉清光和尚が帰命山念仏寺を開創しました。寛永2年（1625）寺号を清光寺と改めています。寛文9年（1669）水野隼人正忠直が本堂以下の設備を整え水野家の廟所とし玄向寺と改めました。



これは、^{ただもと}忠職の法号「道樹院殿信誉上昌玄向大居士」によつています。

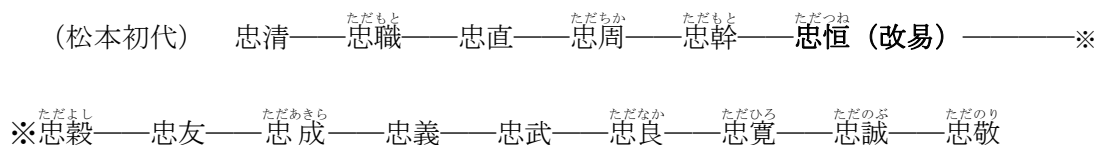
寺域には写真のように以下の方々の墓が並んでいます。

真珠院（忠清）・福寿院（忠清室）
 道樹院（^{ただもと}忠職）・青陽院（忠職室）
 賢徳院（忠直）・柔軟院（忠直室）
 智徳院（^{ただちか}忠周）・（智清院（忠周室）
 徳本院（^{ただもと}忠幹）・

（写真向かって右から初代～5代）

平成16年から17年にかけて行われた「松本城主・水野公廟所復元改修工事」の結果、9基すべてから遺骨が確認されました。「従来3代忠直公の遺骨のみが埋葬されており、他は江戸小石川の伝通院（真珠院）に埋葬され、ここは供養塔だけであると伝えられていたが、今回の調査でいずれも分骨も含め、ここにも遺骨が埋葬されており墓であることがわかった」と「松本城主・水野公廟所復元改修工事概要（2005年 玄向寺）」は述べています。

水野家系図



改易された忠恒は埋葬されてはいません（伝通院に葬られている）。

また、廟所の北側に少し離れて、忠直の生母（昇仙院）とその童子の墓所があります。

4 文政8年(1825) 旧領主水野家大村玄向寺廟参

水野家は享保10年(1725)忠恒の時改易されたが、幕府は、家康の生母於大の方の家筋であったため、忠恒の伯父^{ただよし}忠毅をもって7000石で家名を存続させた。

^{ただよし}忠毅の子^{とぎ}忠友は9歳の時から徳川家治のお伽となり、家治付きの小姓、小姓頭、小姓組番頭格、御用取次見習、御側御用取次を経て明和5年(1768)勝手掛若年寄奥兼(加封されて大名)、安永6年(1777)側用人となり加封され沼津城主となっている。天明元年(1781)勝手掛老中兼帯(このとき3万石)松平定信登場で老中を退き、定信退陣後、寛政8年、後の将軍徳川家慶付き老中に復帰した。享和2年(1802)在任中没した。

次の^{ただあきら}水野忠成は忠友の婿養子で享和2年家督を継ぎ沼津3万石を領した。文化14年老中格、翌年老中となった。財政担当の勝手掛である。将軍家齊の厚い信任をうけ幕政を牛耳った。後、奏者番、寺社奉行、若年寄を経て世子徳川家慶の側用人となり文化14年(1817)本丸老中格を兼ね、文政元年(1818)勝手掛兼任のまま老中となった。文政4年1万石、文政12年に1万石加増を受け沼津5万石の城主となった。

17年間老中首座、勝手掛かりとして辣腕をふるった彼の業績は文政元年から天保3年にかけて8回行われた文政金銀改鑄によって幕府財政の均衡を回復させたこと。文化2年関東取締役出役を強化して治安の維持商業統制を行ったことなど、文政改革の推進者として評価されている。

文政8年(1825)8月26日大村玄向寺に廟参をしたのはこの水野出羽守^{ただあきら}忠成である。

この時忠成は江戸から中山道で松本玄向寺・京都・大坂・奈良・伊勢参宮・尾州徳川家に寄り・刈谷^{りょう}楞巖寺・忠成の給地大浜村陣屋・久能山・沼津というコースであった。

上京の理由は京都所司代の代わりにかかわることとされている。

8月25日は塩尻宿泊で26日には出川町村中田家で小休止があつて松本町に入り4つ時(10時)岡宮神地で小休止、そこから大村玄向寺廟所に参詣している。一行は582人であった。その後、本陣(倉科七郎左衛門)にて昼食を取り、随行した家来たちは本町の17軒に分かれて昼食をとっている。そして、その日に洗馬宿に向け松本を発っている。

なお、小笠原家家老が玄向寺よりの帰路乾瑞寺へ代参、物頭が飛龍山賢忠寺へ代参している。

松本藩はこの時、城下町警備に通行の道筋につながる木戸を閉めさせ立番を立たせた。この時の動員された町内人足は35人、13町の町役人も出役した。松本藩は警備に万全をきすため本町へは年寄太田庄太夫・用人近藤帯刀・物頭関奎兵衛、町奉行小里宇平次(手代2・同心2附)、町々の口へは同心数人ずつを配置している。また25日塩尻宿泊及び26日洗馬宿泊のときも年寄戸田図書・用人畔田弥右衛門・郡奉行神方補助を現地へ出役させている。御使番は下諏訪まで木村仙米兵衛、木曾奈井まで栗田市左衛門であった。時の老中に松本藩としても万全の警備を行ったと思われる。この時、水野家断絶の際、在地に残った元家臣らが出川口、松本入口、玄向寺仁王門前で出迎えを許されている。 終わり